海外だより

体育・スポーツの専門的指導者養成への大学の役割と貢献

九州大学健康科学センター　熊　谷　秋　三

私は，昨年10月１日よりハンガリー共和国ブダペストにあるセメルワイス大学体育スポーツ科学部（旧ハンガリー体育大学）の招聘教授として一年間滞在しておりました。この学部と九州大学の健康科学センターおよび大学院人間環境学府との間には国際交流協定が締結されております。私は，この学部の副学部長（研究・国際交流担当）であり，長年の親友でもあるDr. Radak Zsoltとの国際共同研究を継続しておりますが，今回の滞在では，認知機能，活性酸素，DNA修復酵素と運動をキーワードとした共同研究を行ってまいりました。また，滞在先の博士課程の学生を対象に健康・運動の疫学に関する教育も担当してまいりました。

すでに，九州大学の全学教育広報誌（Radix）にはハンガリーでの滞在記[1]を脱稿しておりますし，滞在中に経験できた「第17回学生のための国際スポーツ科学会議」の傍聴記が体育の科学[2]に掲載されておりますので，ここでは九州大学体育スポーツ連合の話題にふさわしいテーマとして，体育スポーツの実践に関わる専門的指導者養成への大学の役割と貢献に関するテーマを取り上げて，ハンガリーの事情も織り交ぜながら話題提供してみたいと思っております。

ハンガリーでは，ナショナルチームのコーチライセンスの資格取得のためには，著者が滞在した体育スポーツ科学部で開講されている必要な講義科目などを受講しなければならいとのことでした。しかし，例外もあるとの事でした。具体的には，有名選手がそのまま監督やコーチになるケースもあるとのことでした。また，この体育スポーツ科学部は，世界に２箇所しかない国際オリンピック委員会（IOC）が認定するコーチ資格を授与できる機関のひとつでもあります。この事業には，アジア，アフリカ，中近東からの参加者が中心でありますが，毎年，春と秋には３ヶ月の講習会が開催されております。講義は，この学部の教員がノルマオーバーでその教育に携わっておられました。私の友人のZsoltの話によれば，この事業は前IOC会長のサマランチへの働きかけによって達成できたとのことでした。ちなみに，サマランチ前会長はこの学部から名誉博士号を授与されておられます。

一方，わが国のアマチュアスポーツのコーチ資格制度に関しては，文部科学省，体育協会および各スポーツ協会が認定事業を行なっているものと私は理解しておりまが，この資格取得にむけた講習会などでの体育スポーツ科学系の大学教員の貢献度は極めて高いもの思っております。しかし，プロのスポーツ競技のコーチライセンスの取得に関しては，かなりの温度差があるように感じております。また，アマチュアのコーチライセンス取得の場合とは異なり，プロフェッショナルコーチ資格取得への大学の関与も低いような気がしております。体育系専門大学におけるコーチ学専攻の

お別れパーテイで
（著者とProf. Zsolt Radakと）

オリンピア（ＵＳＡ）訪問
（著者，妻とＰGA master golf proffesionalのJoe Thiel氏とプロコーチの育成に関して意見交換した）

ある学部や大学院修了者へは，何らかのコーチ資格は与えられているでしょうか。また，日本のプロスポーツの草分けとしてのプロ野球には，そのようなコーチ資格制度があるのでしょうか？ 昨日まで，選手だった方が，いきなり監督やコーチとなるケースもあるようですが，一体その資格制度はどうなっているのでしょうか？ そのほか，プロフェッショナルスポーツには，テニス，ゴルフ，サッカー，相撲，バレーボール，バスケットボール，自転車競技などもございますが，どのような資格制度でどのように運用がされているのか，また，それらの資格取得への大学の貢献など，興味あるところであります。これは，コーチング学やスポーツマネージメント学の分野における調査研究に関わる内容かもしれませんが，私もその制度に関して調査を行ってみたい興味に駆られております。

以下に個人的な考えとお断りをして，体育スポーツの専門的指導者養成に関する考えを書いてみたいと思っております。私は，プロフェッショナルコーチ資格には種目を問わず専門大学および大学院レベルの専門的知識，技術の取得は必須条件であろうと考えております。プロフェッショナルコーチには，現役プロの指導・助言のみならず，ジュニア選手への指導など，タレント育成にも大きな期待がもたれております。サッカーは，過去には筑波大学に寄附講座を配置し，独自のプロコーチ育成システムを有しているようですが，その他の種目に関しては，私はあまり詳しくありません。アメリカでは，プロゴルフ協会（PGA）の公認のコーチ資格を大学で取得できるシステムが存在します。日本には残念ながら，類似した資格はないのではないでしょうか。

話は変わりますが，国民のこころの健康を担当する実践的な専門家である臨床心理士の資格条件は，心理学系の大学院修士課程の学位取得を義務付けられております。これは，かなり厳しい条件と思われます。スポーツの場合，コーチ取得希望者が体育スポーツ科学部を有する専門課程に入学するとは限らないこともあり，大学の講義の聴講は必須と思っております。また，専門大学は各スポーツ協会との調整を行い，プロフェッショナルコーチの資格制度に専門大学の聴講を義務化し，それを取得単位として認定する制度も検討していくことも考えていく必要があるでしょう。これは，何も各スポーツ協会の独自性を脅かすものではありません。大学は，プロフェッショナルコーチの基礎となる知識・技術などの基礎的な講義科目を担当し，また各協会はそのスポーツ種目の指導技術に特化した養成システムに集中することができるでしょう。

健康運動士指導の受験資格は，平成18年度より体育系の専門課程を修めれば講習会を受講することなく受験資格が与えられることとなりました。この背景には，厚生労働省による健康運動指導士養成の発令が平成17年度から廃止されるという，法令上の問題が背景にはあるようです。最近の健康行政では，疾病予防への運動への役割が期待されております。それは，厚生労働省がいう，「１に運動，２に栄養，しっかり禁煙　最後に薬」というキャッチフレーからも察することが出来るでしょう。厚生労働省はメタボリックシンドロームや介護予防事業への運動の役割を再認識するに至り，体育系大学に健康運動指導士養成の任を委任した形となっております。現在，体育系専門大学には，これを追い風として発展できるかどうかが問われております。

我々は，ここに指摘したプロスポーツのさらなる振興と運動による健康づくりを担当できる専門指導者への国家的な期待を踏まえ，このことが体育スポーツ系専門大学の未来に追い風となるよう，そのモデル化およびシステムづくりを急がなければなりません。私たちは，社会が納得できる体育スポーツ科学の専門性の確立に取り組む絶好の時期に遭遇しています。私たちは，かかる期待への貢献をすべく，日常の研究教育活動を行っていく責任と役割があるのではないでしょうか。

参考資料

1）熊谷秋三：ハンガリー共和国セメルワイス大学体育スポーツ科学部滞在記．Radix（九州大学全学教育広報），No.45.10-11，2006.

2）熊谷秋三：17th International Congress on Sport Science for Students（ICSSS）の傍聴記．体育の科学，11月号，2006.

大学めぐり

福岡女学院大学

福岡女学院大学　角　南　良　幸

１．福岡女学院大学の沿革

本学は，1885年設立の「英和女学校（現福岡市大名）」が前身であり，創立121年目を迎える。1919年に「福岡女学校」として福岡市平尾に移転，1951年に「学校法人福岡女学院」となり，1960年に現在の福岡市南区曰佐に移転した。大学としては，1964年に短期大学（英語科・家政科）を開設し，1985年に国文科を新設した。1990年には，福岡県小郡市小郡に大学（人文学部）を開設，次いで1999年曰佐キャンパスの短期大学を改組して国文科，家政科を廃止し，大学（人間関係学部）を開設した。それに伴い短期大学を短期大学部に名称変更した。2002年には，大学小郡キャンパスを閉鎖し，曰佐キャンパスへの統合を行った。2003年には大学院（人文学研究科）を開設し，曰佐キャンパスには，幼稚園，中学・高校，大学，大学院が設置されている総合学園となっている。大学の付属施設としては，図書館，キリスト教センター，大学メディア教育研究センター，英語教育研究センター，国際交流センター，子ども発達センター，生涯学習センター，天神サテライト（福岡市天神）がある。

2007年度の各学部定員は，大学院・人文学研究科（16名），人文学部・現代文化学科（100名），表現学科（100名），英語学科（40名），人間関係学部・心理学科（120名），子ども発達学科（120名），短期大学部・英語科（200名）となっており，2006年５月１日現在の在学生数は2501名となっている。

建学の精神としては，キリスト教に基づく福岡女学院創立の精神に則り，神を畏れ奉仕に生きるよき社会人としての女性を育成するために，教育基本法および学校教育法に従って，深く専門の学芸に関する教育・研究を行うことを目的としている。

２．体育関係施設

本学には，運動場（6000m²），体育館・第一フロア（バスケットボールコート１面：670m²），第二フロア（300m²），トレーニング室（230m²），テニスコート４面がある。トレーニング室には，空気圧式筋力トレーニング機器15台（Keizer 社製），エアロビックエルゴメーター７台（Monark 社製，Combi 社製），ハイパワーエルゴメーター２台（Combi 社製），トレッドミル１台（StarTrac 社製），脚筋力測定器１台（OG 技研社製），フリーウェイトエリア，マッサージチェア２台が設置され，授業での活用はもちろんのこと，授業以外でも放課後を中心として一般学生，教職員にも積極的に活用されている。

３．体育系クラブ

バスケットボール部，バレーボール部，バドミントン部，創作舞踊部，ソフトテニス部，硬式テニス部，ゴルフ部，ワンダーフォーゲル部，ラクロス部，サッカー部，剣道部の11の部活動と，空手同好会，ダンス同好会，チアリーディング同好会の３つの同好会がある。本学には外部コーチ制が導入されており，クラブ部費の範囲内で外部コーチを招聘できるようになっている。2006年度現在，９部２同好会が外部コーチを招聘して活動している。

４．健康・スポーツ科学関連科目

体育実技科目は，1996年より必修から選択科目に移行している。授業内容もそれまでは，バドミントン，卓球，テニスを中心としたスポーツ種目重視の内容であったが，選択科目移行後は，健康づくりに関する内容を多く盛り込んだものになっている。2003年度からは人文学部，人間関係学部，短期大学部の３学部共通シラバスへの取り組みを行っており，2007年度からは，

３学部共通名称「健康・スポーツ科学実習Ａ（前期）・Ｂ（後期）（いずれも１年次科目）」となる。全学部クラス指定の時間割となっているので，曜日時限によって履修希望者数は異なるが，全学の履修率の推移は，過去５年間の平均で約40％強となっている。前後期共に週に11コマ（人文学部・人間関係学部それぞれ４コマ，短期大学部３コマ）の授業が実施されており，専任教員１名，非常勤講師３名体制で担当してる（2006年度現在）。

授業内容は，主にスポーツ実習と健康づくり実習に分かれている。スポーツ実習では，ラケット種目（卓球，バドミントン，テニス），集団球技種目（バレーボール，バスケットボール），ニュースポーツ種目（インディアカ，ソフトバレーボール，ダブルダッチ，グランドゴルフ，ターゲットバードゴルフ，ユニホッケー，ドッチビー，ペタンクなど）からそれぞれ担当教員が選択して実施している。健康づくり実習では，体力・肥満度の測定評価，活動量を理解した正しく効果的な肥満解消法，有酸素性運動の効用，SAQ（Speed，Agility，Quickness）関連体力・トレーニング方法，バランスボール，スタビライゼーションなどを取り入れている。運動時には必要に応じてカロリーカウンター（Lifecorder）や心拍数計（Polar）を活用し，運動中の消費カロリー，歩数，心拍数を計測してみて，運動に対する自分自身のからだの反応について学習している。

体育・健康科学関係の講義科目としては，人間関係学部および短期大学部に「健康科学理論」，人文学部に「ヘルシーダイエット」が開講されている。実技科目は３学部共通シラバスの作成・主な内容の統一が実現したが，講義科目への対応は今後の課題である。

５．今後の課題

今後の課題としては，第一に体育施設充実へ向けての取り組みが必要である。トレーニング室に関しては，外部資金の導入に成功しかなり充実したものとなったが，特に体育館は，短期大学設立時から築35年が経過しており老朽化が著しい。また，小郡キャンパス統合により全学生数2000人超の大学としても，バスケットボールコート１面では，授業，課外活動ともに狭く場所の確保に苦慮している。現在，様々な方面に必要性を訴えているが，大学運営が厳しい昨今，なかなか良い回答が得られないのが現状である。継続的に必要性を訴えていく所存である。

第二には，一般体育教員が全学で１名しかいないので，多くの時間数を非常勤に依存している問題がある。しかも，その専任教員も所属学科の専門科目を多数担当する必要があり，一般体育は考慮される優先順位が低くなってきている。しかも，全学における体育の方向性に配慮してもらえる気配は少ない。非常勤講師の先生方への負担は大きいが，本学の体育の目的・方向性を理解していただき，共通シラバスに基づいた内容を実施していただくことをお願いしている。大学の生き残りをかけた専門性強化は重要であるが，教養教育の復活，さらには健康増進を含めた体育教育の再構築の重要性を訴え続けていかねばならない。また一般体育の専任教員採用の可能性は低いが，今後も強く要求していきたいと考えていえる。

「体育・スポーツ・健康に関する教育研究会議」春季研修会の概要

１．開催期日：平成18年３月13日（月）～14日（火）
２．会　　場：あおしま太陽閣（宮崎県宮崎市青島西1-16-2）
３．研修内容：
大会テーマ「今，大学体育に求められるもの ── 魅力ある授業づくりと地域への貢献 ──」

⑴　特別講演
「これからの大学体育」
杉山　　進（全国大学体育連合理事長）

⑵　招待講演
「An Overview of 3 U.S. University Non-Major Activity Programs」
Dr. Rafer Luts（Baylor University，USA）

⑶　シンポジウム
「魅力ある授業，価値ある授業 ── 現代の若者の心身問題に如何にして応えるか ──」
コーディネーター　根上　　優（宮崎大学）
「科研費企画調査のデータ分析から」　磯貝　浩久（九州工業大学）
「若者の＜こころ＞の問題から」　　杉山　佳生（九州大学）
「若者の＜体力＞の現状から」　　廣田　　彰（宮崎大学）

⑷　一般研究発表
１）他学部生を対象とした生涯スポーツ演習（保健コース）の取り組み
西田　絵美，日高　恵子，森　　里子，進藤　宗洋（福岡大学）
２）「救急法を用いた健康科学実習授業の一例 ── 大学生による救急法（心肺蘇生法）の授業評価 ──」
石原　一成，上田　　毅（福岡県立大学）
３）コミュニケーションスキル改善・向上を意図した生涯スポーツ演習による社会心理的有効性
西田　順一（福岡大学）
４）全生活型体育をめざす講義
飯干　　明（鹿児島大学）

⑸「大学体育ＦＤ推進校表彰制度」について
森　　正明（中央大学）

⑹　ワークショップ
「ゴルフ授業の展開」
指導：Dr. Rafer Luts（Baylor University，USA）

九州地区大学体育連合春季研修会に参加して

福岡大学スポーツ科学部　**中　山　正　剛**

私は，今回初めてこの研修会に参加させていただいたのですが，これは橋本公雄先生の「これから大学の教員になるんやから参加してみたら？」という一言からでした。

今年の４月から福岡大学に就職が決まっていたこともあり，今大会の「今，大学体育に求められるもの～魅力ある授業づくりと地域への貢献～」というテーマは私の興味をより一層引くものでもありました。

初日の一般研究発表においては，座長の立木宏樹先生の進行の下，円滑に行われました。

福岡大学の西田絵美先生らのご登壇では，「他学部生を対象とした生涯スポーツ演習（保健コース）の取り組み」という視点から，保健コースの目的，内容，成果などが提示されました。学生の自律能力を育成するために，実施可能な運動種目の設定，心拍数に応じて７色に変化する「光るゼッケン」を用いた強度の設定など様々な工夫が施されていました。正課の授業におけるスポーツ活動ができない学生に対して，どのような授業内容を用意すべきか，という知識に乏しかった私にとって大変参考になる内容でした。

続いて，福岡県立大学の石原一成先生らによる，「救急法を用いた健康科学実習授業の一例」という演題で発表が行われました。近年，問題視されている海の事故や不整脈への対応として有効な AED の使用法なども組み込まれており，まさに大学体育（中でも安全対策）に求められるものの一例を紹介していただきました。

次に，福岡大学の西田順一先生による，「コミュニケーションスキル改善・向上を意図した生涯スポーツ演習による社会心理的有効性」においては，学生の対人コミュニケーション能力を高めるために，協力体験や共感体験，援助体験などの介入を行った様子が紹介されました。運動量を確保するだけの授業ではなく，近年問題視されている対話能力や協調性欠如の対策となる授業例のケーススタディでした。

鹿児島大学，飯干明先生の「全生活型体育を目指す講義」では，「運動」だけでなく「栄養」や「休養」，「精神活動」，「環境刺激」の５つの分野を理解させ，その後の行動変容を検討されていました。「運動」以外の項目では，比較的実行に移るまでには至らなかったことから，行動変容の難しさが感じられました。しかし，これらの取り組みは，生活習慣病や心理的な病が急増している昨今において重要視されるべきものであると感じました。

そして，アメリカのベイラー大学から Dr. Rafer Lutz による招待講演「Quality over Quantity: An overview of the Baylor University PETE Program.（量より質：ベイラー大学 PETE プログラムの概要）」が紹介されました。そこでは，アメリカのワシントン州立大学を卒業した経緯を持つ九州大学大学院の藤原大樹君が通訳を務め，フロアとの活発な意見交換がスムーズに行われました。そこで，一番印象に残ったのは，『アメリカの大学体育は徐々に縮小傾向にあるが，日本はこの制度を参考にしてはいけない。なぜならば，アメリカの大学体育は多様化しすぎており，本質を見失っているように感じる』という言葉でした。日本の大学体育も，多様化傾向にありますが，その「本質は何か」を中心において考えるべきだと改めて感じさせられました。

また，「これからの大学体育」という演題で，杉山進先生（全国大学体育連合理事長）による特別講演が行われました。亀丸政弘先生（鹿児島国際大学）の司会の下，これまでの全国大学体育連合の歴史と成果などが紹介されました。さらに，体育授業の制度だけでなく教員の質が向上されない限り根幹は変わらないということも指摘されており，先生の大学体育への熱意がひしひしと感じられました。

二日目のシンポジウムでは，「魅力ある授業，価値ある授業 ── 現代の若者の心身問題にいかにして応えるか ── 」というテーマで根上優先生（宮崎大学）のコーディネイトの下，九州工業大学の磯貝浩久先生，九州大学の杉山佳生先生，宮崎大学の廣田彰先生がパネリストとしてご発表されました。

まず，磯貝先生より「科研費企画調査のデータ分析

から」という題名で，魅力ある授業内容やその実践に関する調査（質問紙法）の分析結果が紹介されました。シンポジウムのキーワードともいうべき“若者層の心身問題”に着眼すると，主体的な態度形成など学生個々人にその関心が向けられてしまう一方で，授業自体を“学生主体”にするスタンスの必要性を提唱されました。学生主体の授業が学生自身の主体性を高めていく可能性を示唆するものであると感じました。大学教育（体育）の中でも様々な分野でこの“主体性”の獲得（形成）は論究されておりますが，紹介された実践例のような授業を履修した場合とそうでない場合を鑑みても，大学卒業後のライフスタイルに及ぼす影響力は今後も関心を持っているところです。

次に，杉山先生の「若者の〈こころ〉の問題から」では，調査結果をもとに若者の「こころ」に資する授業のポイントを，①自己（の心身）への気づき，②コミュニケーションスキルの獲得，③思考・判断経験を通じた認知的能力の向上，と指摘されていました。なかでも“コミュニケーションスキル”向上を意図した九州大学の実践例を紹介されたのですが，さらに，その前提には対処すべき「こころ」の問題を明確にすることの必要性も併せて指摘されていました。コミュニケーション能力は自己表現と表裏一体ですが，「自分も相手も大切にした自己表現」であり，自分の意見等を率直にその状況に合わせて，適切に相手に表現できるような場面を授業の中で展開していく必要があると感じました。

最後に，廣田先生の「若者の〈体力〉の現状から」では，「体育科目（実習等も含む）」が学生から高い評価を得ている一方で，体力低下の問題点を指摘し，その対策の必要性を報告されました。大学で「体育」を学ぶ意義について，真に理解してもらうことが第一ですが，実技の中でその理解を得ることは難しいと言えるでしょう。逆に，戦前体育のような体力向上のみを意図した授業内容にのみ焦点化することは，まさに“学生主体”の授業から遠ざかることを意味し，多様化する若者の心身問題の解決策にはならないでしょう。今後は学生意識の詳細理解を，学生の体力向上に結びつけられるような授業に変えていかなければならないと思いました。

私も現在４月から大学体育の授業をしていますが，この研修会で学んだことを活かしてこれからも魅力ある授業づくりに励んでいきたいと思います。

末筆ではありますが，このような貴重な機会を与えてくださった，角南良幸先生，西田順一先生に心から感謝の意を表したいと思います。